

法人内交換取材

第二弾

前号から始めた交換取材ですが、第二弾は南ブロックの北の沢デイセンタリーの西尾と第2この実乗の植口が西ブロックのこの実サポートステーションへ取材にいきました。



この実サポートステーション

この実サポートステーションへの 見学を終えて

【はじめに】

この実サポートステーションには、入職時に一日実習を受けさせていただいたことがあったのですが、今回、取材という形で話を伺うことができ、改めて施設への理解を深めることができました。この度、忙しい中取材に協力していただいた、この実サポートステーションの養生・佐藤施設長をはじめとした職員の方には、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

【この実サポートステーション設立の経緯】

取材では、まずこの実サポートステーション設立の経緯について話を伺いました。この実サポートステーションの設立当時の日中活動は、この実乗の入所養生と通所部養生、小規模作業所「バック2・5」と乗り合わせが複雑となっている状況があり、日中活動の場の整備が課題となっていました。そのような状況の中、この実サポートステーションは働く場としての通所授産施設（現生活介護）はたらくらく（従業員30名）暮らしの支

援として短期生活施設（現グループホーム）IIレスパイトハウス（短期入所棟）「りらっく」・トレニングハウス（トレニング棟）「すきっぷ」・ステップアップハウス（自閉棟）「すいんぐ」、各棟完全個室従業員五～六名、既存の地域交流ホームから成る施設として、平成十三年十二月一日に設立されています。



すいんぐ



すきっぷ



りらっく

【この実サポルトステーションの
事業・活動内容】

次に、この実サポルトステーションの事業・活動内容について、紹介させていただきます。「はたらくく」の名前の由来は「働く」、「傍（はた）の人の人を楽（らく）しむ」とのことです。現在、「はたらくく」は定員40名の生活介護事業所「すてっぷ」として、企業からの下請けの箱の組立て、羊毛による作品作り、盤渓での外作業を中心に余暇や行事を交えながら、一人一人に合った活動の場を用意しており、通所してくる乗生が集まり、各活動場所へと向かう拠点としての役割を果たしているとのこと。

この実サポルトステーションの管轄するグループホームは現在、この実支援センターのグループホームと統合し、「この実らいふネット」として事業展開を行っているとのこと。この実サポルトステーションは、この実らいふネットを目的として設立されており、「すてっぷ」は入所から地域生活へのステップ、グループホーム体験を目的に設立されたことでした。また、今回の取材の中でも特に印象的だった「すいんぐ」は一番こだわりの強い養生を想定し、設計の段階から、台所や洗濯場の視覚遮断、水と場所ごとに一括制御、発声に配慮し更にも窓を閉められるようフローラの設置を行うなど、職員の意見が反映され

た工夫を行っているそうです。ハードの面から自閉症の方に配慮を行うのは現在では当たり前になっていますが、当時、乗生一人ひとりの特性に焦点を当てたグループホームづくりを行ったことについて、当時の先輩職員の方の先進性を改めて実感することが出来ました。また、この実サポルトステーションは地域への貢献活動にも取り組んでいます。「作業・宿泊体験」は中学校科別支援学級、高等支援学級に通う児童を対象に、学校とは違う集団での活動や、家族から離れての宿泊という体験を提供することと目的に、この実サポルトステーション開設前の平成十三年夏に試みを行い、平成十四年春休みから本格実施されています。「あそび虫クラブ」は作業・宿泊体験実習と同様の学齢児童を対象に、学校の週休二日制の完全実施に伴う土曜日の余暇活動を提供することを目的に、平成十四年六月より開始されています。開始当初は、音楽パソコン、乗馬の三つの種目で活動を行っていたが、児童の休日の過ごし方の多様化に伴う参加者の減少により、平成二十年度末をもってあそび虫クラブとしての活動は終了しています。ただ、外部の児童等と対象に「乗馬」は、「この実乗馬クラブ」として、現在も継続しているとのこと。



【各作業場の紹介・盤渓作業場】

続いて各作業場の紹介をさせていただきます。盤渓作業場は名前のとおり、自然豊かな中央区盤渓に作られた作業場です。盤渓作業場に行くときはまず目に入ってくる「からまつ山」は、かつて職員と乗生が「からまつ山」の建物であるとのこと。現在でも活動の場休憩を行う場所として有意義に活用されています。



毎日のお世話が大切です

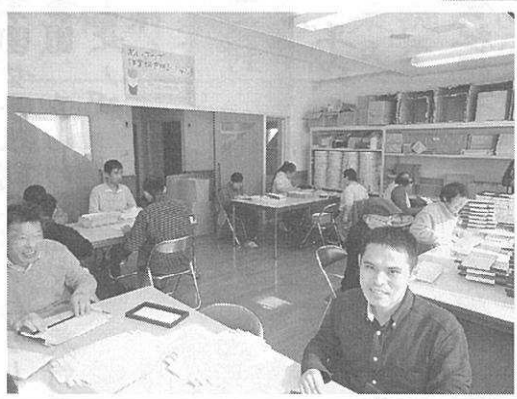
盤渓作業場には、先にも紹介させていただいたこの実乗馬クラブの馬の飼育や、養鶏が行われています。これらは乗生に動物とのふれあいや、多様な作業内容を提供するということにも繋がっているほかにも、そもそもの

きっかけが職員の提案であったこともあり、職員のやりたいこと、得意なことを活かすことにも繋がっています。実際に、土まみれになりながら活き活きと働いている養生や、職員の姿を見てみると、この作業場が皆に愛された作業場であるというのを感じることができました。また、笠原作業場では腐葉土を作っており、これは地域への販売も行っており、多くの注文を頂いているということでした。自然豊かな環境における作業は、健康な心と体を育むだけでなく、こだわりの強い養生にとって、外部からの刺激の少ない中で心を落ち着けて作業に取り組むことが出来る環境になっているのではないかと感じました。

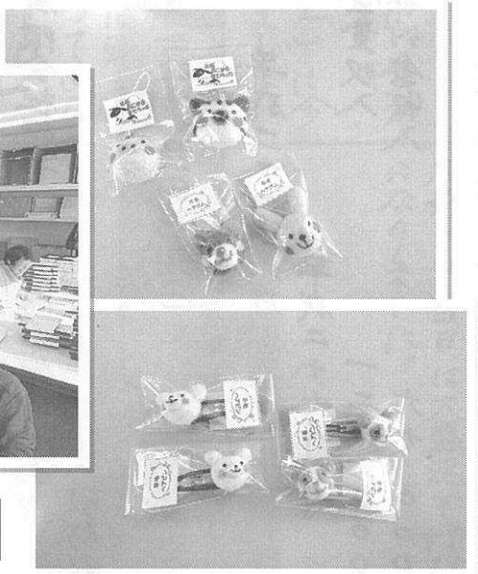
【各作業場の紹介
箱折り、羊毛作品作り】

この実サポーターシヨンの「はたらくらく」では企業から下請けで行っている製品の箱の組み立て作業、羊毛作品作りを行っています。箱の組み立てでは、真剣な表情で作業に集中して取り組む養生の姿を見ると刺激を受けました。養生の手際良く箱を折る様子を見てみると、「自分ではこんなに上手に折ることはできないな」と感じてしまいました。羊毛作品作りはなかなか作業に参加することが出来ない養生に対して、なんとが作業に参加してもらいたいと始めたのがきっかけ

けこのことです。養生は中に入っている羊毛が丸くなるようにと、羊毛が入れられたカプセルを一生懸命振り回して回して、こうして形を整えられた羊毛は職員の手で加工された元氣シヨップさんなどで販売されているとのこと。養生一人一人の特性を考え、それに合った作業の提供を考える職員の努力が印象的でした。



皆さんの作業風景と羊毛作品



【これからの課題について】

最後に、自分が普段行っている業務における「高齢化」という課題を踏まえて、この実サポーターシヨンのこれからの課題について伺いました。この実サポーターシヨンの日中活動では養生が段々と年を重ねていく中、以前のようになた作業を提供するのではなく、業一みや余暇を取り入れた活動に取り組んでいくとの話も伺いました。ただ一方では、作業をまだまだ頑張れる。作業を必要としている養生もあり、仕事と余暇を両立させていくためには、今までの以上に養生一人ひとりに目を向けた活動の組み立てが必要になっていくのではないかと思います。高齢化という共通した課題の中、職員の介護量や、個別的な対応が必要なケースも増えてきています。これからは職員それぞれが技量を上げるのはもちろんですが、全職員が知恵を出し合い、業務の無駄をなくしていくことが大事であるということも改めて考えさせられました。



【取材を終えて】

今回の取材では、この実サポートステーションがどのような取り組みを行っているかを知ることが出来たのはもちろんですが、そこにいる兼生のひたむきさや目の輝き、職員の兼生に対する深い愛情を感じることも出来たのが一番の収穫でした。西プロックと南プロックと働いている場所は違いますが、それこそが札幌この実会がこれまで大事にしてきたものであり、これから私たちが受け継いでいかなければならないのであると感じることが出来ました。日々の業務の中、忙しさに言い訳をして大事なことを見失ってしまったりする時もあります。今回の取材で得た経験を活かし、兼生たちに少しでも笑顔と届けられるよう、努力を重ねていきたいと思っております。

北の沢デイセンター 西尾 朋泰
第2この実会 樋口 賢治

おくりものありがとう

平成二十七年六月、八月

札幌こども専門学校 岩城文彦

光塩学園女子短期大学 わらべ会
弘徳学園 もいわ夏まつり実行委員
スパ北ノ沢

金一封

平成二十七年六月
平成二十七年八月

有限会社藤貴 鎌田修 原田綾子
(敬称略)

支える会のお知らせ

平成二十七年六月、

会費収入 平成二十七年八月 一、二六、〇〇〇円
寄付金収入 六七、〇〇〇円

会費納入者・寄付金

- 早見紀子 仲鉢勇三 仲鉢節子
- 中村和子 仲鉢かおり 仲鉢勇一
- 長南シケミ 内田嘉寿子 橋本靖子
- 湯谷友美 土居洋子 森岡幸子
- 古田久子 和田晴子 大和田正子
- 北海道園札幌高校園林先生
- 鎌田修 小原忠博 小原トク子

- 武部ノリ 南久美子 佐久間徹
- 油谷理佳 原田綾子 松本隼
- 松本周秋 松本昭子 藤原タツ
- 高谷陽子 中村善文 辻藤義輝
- 近藤康子 近藤輝 岩間勝廣
- 庄司幸枝 北田利子 坪田裕美
- 齋藤公也 北田徹 北田公子

(敬称略)

編集後記

ふと気がつくときあつという間に雪が積り、冬を迎えておりました。除雪の時期が始まりを告げています。早く暖い季節になってほしいなと既に思っている私でございます。しかし、雪は待ってはくれません。容赦なく降り積もり除雪の毎日。これを機に少しは瘦せないかなと淡い思いを抱いています。
(この実だより編集委員 樋口賢治)

この実だより第二〇二号

編集者 加藤 孝

発行者 札幌この実会

住所 〒063-1009

発行 札幌市西区西野九六九番地
平成二十七年十二月一日